

審査前講評

随分私のコメントは質問の中で込めたと思うのですが、少し大きな観点から述べさせていただきます。

非常に具体的でいい提案が多かったんですが、同時に現状を前提として、じゃあどうしたらいいんだろうっていうことと、もう一つ、時代がどういうふうに変わっていてどんなふうな社会というのを理想として、そこからこういうふうになったら会社にとっても自分たちにとっても良くなるような、そういう社会に近づかっていう、そういった理想みたいなものを見てもいいのかなっていうふうに思います。どういう社会になってほしいのか。自分がどんなふうに生きたいのか。そこを考えていくとすごくハッピーに生きられるんじゃないかなというふうに思います。そういう面で個人というのが主役になっていくと思うんですね。今までの社会っていうのはどっちかっていうと、今もそうなんだけれども、会社にどう自分を合わせていくのかということが、お父さんの時代とか私の時代もそうですけども、問われてきたわけですけども、これからの時代というのは個人が中心になって生きていく時代なんですね。そして多くの人が家族を形成していきだろろうし、最終的にはハッピーに生きて終わりたいという、すごくそういう意味では時代の変わり目にあると思います。その中でじゃあ会社にどういう提案をして、個人が一生充実して生きるために何をして欲しいのか。それは会社にとって **acceptable** なオファーなのかということが問われてくるのかな。そういう面で非常に大きな時代の転換点にあると思います。語られたことはすごく多くあります。スペシャリストという道があまりないよねっていう、そういう提案もあったと思うんだけど、これは非常に重要な視点かなあと。個人で見たときにやっぱり何か自分に専門性があるということにおいて、生き方が非常に柔軟になっていくということだと思うんですね。一生人生を会社に捧げないというふうに考えると、じゃあ労働者にとって安定して生きるためにいったい何が必要なのかということ。それを提供するのが会社の大きな役割になってきているというふうに思いました。

最後に1点なんですけれども、ポジティブ・アクションについて語られたこともあったと思います。最近の新しい調査なんですけども、高学歴の女性で辞める一番大きな理由は何かという。私はもう結婚、育児だろうというふうに思っていたんですが、実はその調査によるとそれはむしろドイツとかアメリカの方で、日本はキャリアに展望が持たなくてやめる女性が4人中3人だということなんですね。やっぱり個人が主役に生きるときに、企業が女性の能力開発をしていない。そのために仕事をやめる女性が多い。ここがこの次の課題かなというふうに思っています。そういう意味で、両立支援も大切ですが、女性社員の能力開発を会社がきっちりやることが重要だと個人的には思っています。

皆さんの発表を非常に興味深く拝聴しました。大学生がこんなにも堂々と発表するんだってことを知り、自分の学生時代ではとても考えられないことだったので、大きな進歩だ

と、非常に心強く思いました。以上です。

総合講評

本当にご苦勞様でした。特に、男性の参加が多かったことがとても嬉しかったです。女性の活躍っていうと、なんとなく女性だけが参加するのかなって最初は思っていたんですけど、今日はもう本当にバランスが取れた割合でこれからどんどん男性が増えてくるんじゃないかなと思って。本当に女性問題って男性問題ですよ。やっぱり男性を魅力的にするのも女性だし、逆も真なりということで、やっぱり両方が影響しあっていい関係を作っていくんだなというふうに思いましたので、そんな関係がちらちらと見えたりしてとても嬉しく思いました。

私はちょっと皆さんよりも、というかこの審査員の中で一番年上ですし、専業主婦時代に学生時代を送ったので、私の学生時代の話をしてあまり面白くないと思うのですが、そのあとにアメリカに行って、アメリカの、今ちょっとM字就労という、授業でやると思いますが、M字就労から台形に女性の就業パターンが移る、その時代ってどういう時代なの？っていうふうに聞いてくれたらお話できる。ちょうどその女性が、アメリカの場合には専門職市場としてずっと発展していくんですね。あれあれ？という間に例えば弁護士になる女性が増えたりとか、時代が180度変わってしまうっていう、その中でもものすごい追い風が吹いていくという、そういう時代を経験しました。後押ししてもらえたんですね。私はもう専業主婦で帰っても仕事なんかない国から行っているわけですけども、女性には。そうすると背中押してくれるんですね。そんなこと言うなど。まだもうちょっとやればできるんだという、そういう後押しがなければね、自分はできなかったなというふうに思うんですね。そういう面で今この歳になると、やっぱりそういう風を吹かせる立場になっているので、なんかみんなにやっぱり押してあげたいと思います。本当に不安だったし、私なんか何ができるんだろうというふうに思ったんだけど、やっぱりでも **Why not?** という、**Everything is possible** という。それは君さえやる気になればできるんだよという、その言葉を皆さんに本当にあげたいし、そういう社会を作りたいなというふうに思っています。そういう意味でずっとこう研究者になってから、やっぱり日本ってどんな国なのかなっていうところで、アメリカに行ったりアジアに行ったりしていろんな研究者とコミュニケーションを取ってきました。一番最近の話だけしたいと思います。

さっき日本の女性の4人に3人はキャリアに先が見えなくて辞めてしまっているという、その調査をしたシンクタンクのトップのシルビア・ヒューレットさんという方なんですけれども、ちょっと時代的に似ているような経験をしている人に話を聞きました。本当に女性の活躍が進むか進まないかが、企業が生き残れるかどうかの鍵になっているんだなとい

うのを感じたんですね。今本当にグローバル化で、さっきもいろんな先生がおっしゃったように、女性の視点、外国人の視点、もう多様性ということを国が理解してお互いを認め合って新しいアイデアがでてこないともうダメなんですね。そういう時代に女性をサポートして、もうそうそうたる企業がお金を出して調査して、ブラジル・中国・インド、そして日本・アメリカ・ドイツという、そういうところで高学歴の女性でこれだけ教育を受けてサポートを受けた人が、その後どういうふうに活躍しているのか。それはただ、この国が活躍が遅いねというだけじゃなくて、お互いに学びあいながらそのサポートの仕組みを作っていく。M字から台形になったときのアメリカっていうのは、結構専門性を身につけて、キャリアをその人が形成していけばいいよねという。でもその時代は終わったんでいうんですね。そのシルビアさんは。今はもう企業がどうやって優秀な人材を育成したあとにね、キープしていくのかと。そのキャリアっていうのがオンオフっていう、それだけじゃなくて、オンで継続だけじゃダメなんだ。アップだって。これをどうやってアップさせていくのかっていうので、メンターシップもいいけどそれを超えてスポンサーシップという、これは、思い出してみるとやっぱり皆さんそうなんですけれど、自分が働いているときにみんな自信ないですよ？最初はね、私にはそんなことできないとか。でも誰かが背中を押してくれる、で、これは私自身もいろんな人に、さっきも言ったように背中を押してもらって、大丈夫だよ！やれるよ絶対！と、それをもうちょっと積極的にやっていくということなんですね。だからスポンサーを見つけてマッチングさせて、何かあったときに彼女を推薦して、いろんな機会を与えていく。そういう中で継続を進めていこうという、そういうプログラムがオーストラリアでも今導入されていると聞きましたし、今ちょっと日本でもできるのかなということも検討されているということで、もうそれぐらいに女性の活用、今日話したことというのは、日本の将来を決める重要なことになっていると。そういうときにね、皆さんからアイデアを出していただいたということで、非常に記念すべき第一回のコンペティションになったのではないかと思います。本当にご苦労様でした。いろんなことを勉強させていただきました。それでぜひ、みんなで背中を押してみんなで成長していくという、これが本当に大切だと思います。そんな社会ができるように祈っています。